

木村靖二著

『第一次世界大戦』

(ちくま新書 1082)

筑摩書房 二〇一四・七刊
B 40 二四〇頁 七八〇円

二〇一四年の夏、ベルリンの大型書店には、第一次世界大戦に関わる書籍が所狭しと山積みされ、ウンター・デン・リンデンにあるドイツ歴史博物館では、戦場での兵士の体験に重点をおいた第一次世界大戦の展示が戦争の悲惨さを訴えていた。

大戦勃発から百周年を迎え、現代史の起点であり歴史となった戦争への新たな関心と興味が呼び起こされている。だが同時に、近年の世界をめぐる不確かな状況、各地で勃発する戦争や内戦、ウクライナをめぐる危機などへの不安がそこに投影されているかのようにも思える。大戦勃発までの息詰まる諸国間の関係を描いた著書をクリストファー・クラークが『夢遊病者たち』と名づけたのも、そうした冷戦後の混沌とした世界情勢が念頭にあった。これまで縁が薄く、さほど大きな関心と呼ばなかった日本でも、山室信一氏を中心とする京都大学人文科学研究所の研究プロジェクトから生まれた「レクチャー 第一次世界大戦を考える」シリーズ(人文書院)、論文集『現代の起点 第一次世界大戦』(全四巻)(岩波書店)や『第一次世界大戦と帝国の遺産』(山川出版社)など、この大戦のさまざまな側面をめぐる議論が活性化している。

そういう中で、ドイツ史研究者の著者があえて挑んだのは、この大戦のコンパクトな通史という、日本ではほとんど前例のない試みである。一つは、この大戦に関わる歴史研究の現段階と大戦像の変遷を明らかにすること、もう一つは、これまで戦史・軍事史の領域で扱われてきた戦争そのものの推移、前線での兵士の動向などに注目すること、そしてドイツを中心としながら、各国の動向をここに盛り込むこと、ここに本書の意図がある。

序章では、これまでの研究史の流れが大戦原因論から大戦そのものへの研究の移行として手際よく整理されている。大戦の始まりを扱った第一章でも、大戦勃発についてのセルビア責任論の行き過ぎにさらすと触れたり、大戦直後の「愛国的熱狂」が一部にすぎなかったとその神話性を指摘したりと、著者の着眼点が生きている。

戦争の行方を追った本論の四つの章では、国内での総動員、総力戦体制の構築とその破綻が戦場での出来事といかに関連していたのか、西部での塹壕戦と東部での機動戦、その後の軍指導部の目算、戦場での兵士の大量殺戮、武器や戦闘のやり方、塹壕兵士の日常生活などを手がかりに明らかにされる。また、オスマン帝国でのガリポリ戦、イタリア戦線など広範囲な戦闘の様相、オスマン帝国下でのアルメニア人追放やドイツでの反ユダヤ主義の拡大、英仏での植民地軍の動員やフランス軍兵士の「反乱」にも周到に目配りされている。

最後に著者は、第一次世界大戦の歴史的な位置づけを、とりわけ国際体制の転換、帝国から国民国家への移行、政治への国民参加

と福祉国家化という側面からまとめ、この大戦がその後の戦争と破局の原点、ナチスと大量殺戮を導く原点となったという見方を紹介する。

著者の専門からドイツに関する記述が多いとはいえ、各国の前線と銃後の動向にもきめ細かく立ち入り、最新の研究動向をふまえた本書は、第一次世界大戦に関するスタンダードな入門書として初心者にも研究者にも末永く読まれることになる。

(相馬保夫)